

附属中学校における方言授業実践報告

How to teach Gifu dialects to Junior High School Students

山田敏弘^[1]・野々村琢磨^[2]・豊田有美^[2]・市橋聖也^[2]

YAMADA Toshihiro, NONOMURA Takuma,

TOYODA Yumi, ICHIHASHI Seiya

1. はじめに

中学校の新学習指導要領が平成 29 年に改訂され、令和 2 年度から新しい学習指導要領の下での教育が行われようとしている。今回の新学習指導要領では、中学校での方言の扱いが大きく改められ、より伝承に重きを置いた授業が求められるようになった。

岐阜県では、多くの学校で浜島書店の『国語便覧』が用いられ、その中に「岐阜の言葉（方言）」という記述がある。もちろん改良すべき所はした上で、多くの学校ですでに生徒が持っている資料として活用しながら、岐阜県の方言について教えることは有効である。

本考察は、このような考えの上で、2019 年 2 月 18 日及び 26 日に岐阜大学附属中学校において、3 名の教諭の協力を得ておこなった方言に関する授業について報告し、これからのより有効な方言教育の方法を考えるものである。

2. 考察の前提

2.1 新学習指導要領における方言の扱い

平成 29 年告示の『新中学校学習指導要領 国語科』において、方言に関しては、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「イ 言葉の特徴やきまりに関する事項」に次のような記述がある。

(ア) 話し言葉と書き言葉との違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについて理解すること。

これまで、「共通語と方言の果たす役割などについて理解するとともに、敬語についての理解を深め生活の中で適切に使えるようにすること」と指導されてきた方言の扱いが、文体や敬語（待遇表現）とともに、コミュニケーションの上で重要なツールのひとつであると認められた点が注目に値する。これを受け、『同解説』には、次のように記される。

共通語は地域を越えて通じる言葉であり、方言はある地域に限って使用される言葉である。共通語を適切に使うことは、人々が相互の理解を進めるために不可欠な能力である。一方、方言は、生まれ育った地域の風土や文化とともに歴史的・社会的な伝統に裏付けられた言語である。その表現の豊かさと魅力など、方言が担っている役割を十分理解させ、方言を尊重する気持ちをもたせるようにしながら、共通語と方言とを時と場合などに応じて使い分けられるように指導することが大切である。

学習指導要領の上でもふるさと教育は重要度を増しており、具体的に岐阜県で言えば、岐阜で育っ

た若い世代に、この岐阜をよりよく知ってもらう必要がある。その中に方言もある。

これからの時代、共通語と岐阜方言の両方を理解し尊重し使い分けられることが必要である。

2.2 岐阜県民の方言観

『月刊言語』1995年11月別冊「変容する日本の方言」、ならびにその詳細な分析である佐藤・米田編(1999)に載った全国14地点2800名の言語意識調査の結果は衝撃的であった。札幌、弘前、仙台、千葉、東京、松本、大垣、金沢、京都、広島、高知、福岡、鹿児島、那覇という全国14地点の中で、岐阜県大垣市では、方言に対して否定的な態度が顕著であったためである。

佐藤・米田(1999:25-29)に見られる「あなたは方言が好きですか」(当該項目は沖裕子執筆)という問いに対し、大垣は、高校生でこそ千葉より4%高い26%の肯定率であるが、活躍層では千葉と同率で全国最下位(26%)、さらに高年層においては、ダントツの最下位(36%)であった。岐阜県内すべてにおいて、方言に対するイメージがこれほど低いかという詳細な調査はなく、大垣一地点で岐阜県を代表させてよいかという問題はあるが、岐阜県民の自方言に対するイメージの悪さは否定しえないであろう。

このことは、ブランド総合研究所が2016年に発表した47都道府県「郷土愛ランキング」(回答者29,046人)で、岐阜県が自慢度45位、愛着度最下位に甘んじたという結果にも表れている(データは、『週刊ダイヤモンド』(DIAMOND ONLINE 2016.5.9より=2020.1.6最終確認)。

岐阜県民がどんどん減っているという事実(2019年11月現在198.8万人。2000年には210.8万人であった)が、この愛着度・自慢度だけによるわけではないが、工業県である愛知県にも近く比較的住みよい県でありながら、このような人口減少が見られるのは、やはり、岐阜県というものに対する愛着を高める必要があることを物語っている。その中でもっとも重要な要素のひとつが人であり、言葉なのである。

この方言に対する否定的感情はなぜ生じるのであろうか。教育熱心であることが否定的な感情を醸成しているとは言えないことは、同調査の松本の結果からも分かる(松本では高校生の74%が「方言が好き」と答えており、全国1位である)。しかし、長野県の教育熱心さは、長野県歌「信濃の国」に代表される郷土を大切にす教育であり、岐阜県の教育熱心さとは性質の違うものである。岐阜県の教育熱心さというのは、かつて高校で熱心に指導され、現在でも進学校では進路指導で口にされる「地元に残る者は負け組」という教育、つまり立身出世のためには故郷を捨てて東京に出ることが第一という教育熱心さである。もちろん、統計的証拠は挙げられないが、岐阜県内の高校に通い岐阜県内の大学に奉職し、一方で岐阜県内の高校に4人の子どもを通わせている筆者の実感として上記のことは事実として述べられるし、実際に3人の息子達が通った岐阜高校ではそのような指導が行われていた。岐阜県の教育熱心さの中には、故郷を否定することが含まれていることが多い。

故郷を相対的に見ることで自分が悪いわけではないが、言葉の教育においてこの教育熱心さが出ると、かつて学習指導要領に「訛を直す」などと書かれていたことを堅実に守った教師によって、方言は悪で共通語に直さなければならないという教育現場での呪縛が支配的になる。岐阜県民の方言観は、このようにして長年蓄積された教育熱心さによる方言卑下の方針が結実したものと言えよう。

2.3 本授業の目的

このように方言に対して否定的な考え方が、さきの調査でも分かるように、当時の高校生(2019年現在では40歳前後)ではやや薄らいできているとは言え、まだまだ強く残る岐阜県である。そのことが愛着度最下位という状態を招いたとすれば、方言という自らの言語文化が持っている価値を明確に学ばせ、それを岐阜県の方言においても具体的に教える必要がある。そのためには、国語教育現場で何が必要かを改めて考えなければならない。

また、岐阜県の特徴としては、どこかの「極」となることは叶わない。東京でも大阪（関西）でもない（さらには名古屋でもない）という消去法的な立ち位置を、積極的に捉えることが重要である。これは方言でも同じである。つまり、「岐阜県方言」などという純粋に独特な言語は存在しない。東西方言の移行地域としてのハイブリッドな特徴を、東西方言と（場合によっては名古屋方言と）比較しながら示すことが必要となる。

これらのことから、本授業では、「岐阜の方言は西か東か」を討論させることにより、そのいずれでもなく、その両方の特徴を併せ持つことこそ岐阜方言の特徴であるという結論にもっていくことが肝要であると考えた。方言の実態を教師が解説し、生徒たちが自身で岐阜県方言の特徴をハイブリッドなものとして捉えてくれることを目標として、今回の授業をおこなった。

このような主体的・協働的な学びにするために、方言について考え話し合う時間を十分に取ることにした。なお、主たる授業者は山田であり、附属中学校2年生の4クラスを、午前中の4コマを使って順に教え、それぞれのクラスで教科担任の3名の附属中学校教諭がサポートについた。

以下、具体的な授業内容とその利点及び反省点を示す。

3. 授業実践

3.1 導入としての方言会話について

浜島書店の『国語便覧』では、岐阜の典型的な方言会話から始まっている。

「ハアイ、アレ、ヨーオンサッタナモ。アガッテクンサイ。」

「ヤットカメヤナモ。マメカナ。」

「マメジャ。」

美濃方言としては典型的な会話は、附属中学校にも勤務された加藤毅『滅びゆく方言を尋ねて—美濃と飛騨』から引用されているが、題名に「滅びゆく」とあるように、このような会話はすでにすたれ果てたものであり、中学生の反応はよくない。つまりまったく聞き覚えがないのである。「ヤットカメ」や「マメ」といった岐阜方言の典型的な語句についても、今回の授業時に尋ねたところ、1、2名を除き、ほとんどの生徒が知らなかった。典型的な岐阜方言に関する記憶がない中学生には、別の会話が必要なのかもしれない。

実は、当日、別の会話を用意していった。

「おまはん、いつまで寝ちよんさるな。はよ、起きんさえ。」

「きょうは、仕事あらへんのやで、まーちょっと寝かいといてくれんかなお。」

「はよ、起きよて。あとで服買ったるで、ヤマカツいっしょに行こまい。」

「えらいで、行きたないわえ。」

文法的な要素をふんだんに入れたこの山田自作の会話は、最初のクラスに提示したが、長すぎたこととやはりなじみがない言葉が多かったことで、混乱をきたした。「ヤマカツ」などは、かつて名鉄岐阜駅前にあった百貨店の名前であるが、現在の50代以上で覚えている人がいる程度の固有名詞である。しかも長すぎて中学生には解説しきれないということで、2クラス目からは『国語便覧』の会話を挙げて説明した。それでも、十分に特徴を掴ませるには、現在の中学生には難しすぎた。伝統的な方言会話は、すでに古典語のような存在であり、生徒たちの実態から乖離していることを、より意識してモデル会話を作らなければならないのである。

このようなものよりも次のような会話がよかったのかもしれない。

「あんた、カド・ケドやってきた？」

「忘れてまった。机の上や。」

「あかんやん。まーえーけど、靴、ひもがほどけとるよ。」

「カド・ケド」は、「漢字ドリル・計算ドリル」の略称として、ほぼ岐阜県だけで用いられている語

句である。「B紙（模造紙）」などとともに、学校用語には地域限定のものが多いため、日常使っている言葉は、方言なのだという意識を持たせることができる。また、「～テマウ（～てしまう）」や「～トル（～ている）」は、若い世代にも頻用される形式である。指定辞の「ヤ」も同様である。文法形式には、地域共通語を作っている要素が多い。さらに、「靴」は、一見共通語に見えるが、実際にはアクセントが異なる。この点については次節で詳しく見るが、中学生用の便覧であれば、やはりわかる方言会話が導入となっていることが重要ではないだろうか。

3.2 音声（アクセント）について

『国語便覧』の「岐阜の言葉（方言）」に記述されるアクセントは、複雑である。

3							2					拍数
E	D	C		B		A	E	D	C	B	A	群
		④	③	②	①							語例
「雨」が「春は」 「兜」 「野原」	「笠」が「絹は」 「兎」 「雀」	「山」が「犬は」 「命」 「涙」	「山」の「鏡」 「頭」	「紙」が「川は」 「は」 「たち」	「風」も「娘」 「小豆」	「風」が「水は」 「桜」 「柳」	「書」き「切れ」 「雨」 「春」	「木」が「手は」 「笠」 「絹」	「山」 「犬」	「葉」が「日は」 「紙」 「川」	「蚊」が「血は」 「風」 「水」	東京式
● ○ ○ ○ 型	○ ○ ● ● ○ ○ 型	● ○ ○ ○ 型	○ ○ ● ● 型	● ○ ○ ○ 型	○ ○ ● ● 型	○ ● ● 型	● ○ 型	○ ● 型	○ ○ ● ● 型	○ ● 型	岐阜式	
● ○ ○ 型	○ ○ ○ 型	○ ● ○ ○ 型	○ ● ● ○ 型	○ ○ ○ ○ 型	○ ● ● ○ 型	○ ● ● ○ 型	○ ○ ○ ○ 型	○ ○ ○ ○ 型	● ○ ○ ○ 型	● ● ○ 型	京阪式	

表1 浜島書店『国語便覧』「岐阜の言葉（方言）」より

(併存する語形に付された中括弧は省略した)

2拍語としては、A～Eの5群に分けられているが、なぜ5分類なのか。それは、当然、方言学で一般的になっている古代京都のアクセント類が基本となっていると考えられる。しかし、実際に現代語では、東京式で3類、京阪式でも4類にしか分類されない。しかも、その組み合わせは、東京式の2類・3類は京阪式でも同じ型を採っており、古代の京阪アクセントを知らないし知る必要もない中学生にとって、この5分類は必要ないのである。少なくとも、今回教えた際にはその説明をしなければならなくなり無駄に思えた。せつかく伝統的な方言学で用いられる用語を避け「A～E」としたのであれば、差を最小限に示せる4分類が説明しやすい。

また、この2拍語といっしょに1音節名詞の助詞が付いた「蚊が」「血は」がA類（すなわち2音節名詞の第1類に相当）、「葉が」「日は」がB類（同じく第2類）、「木が」「手は」がD類（同じく4類）となっており混乱を来す分類となっている。1音節名詞は分けて表にし、東濃地方を除く岐阜県

の広範囲で、ここで言うB類が、東京式で「○(●)」(●は高い音節、○は低い音節を示す)であるのに対して、岐阜(便覧では「岐阜式」と独自の用語を用いるが聞き慣れない)では「●(○)」と逆になることが示されるだけで十分である。むしろ、ここでは岐阜でのアクセントが示されていないことが問題である。

アクセントに関しては、3音節語も示されているが、同時に2音節語の助詞が付された形も表に挙げられており、さらに複雑になっている。個別に言えば、現在「命」などは東京でも頭高型で、伝統的な中高型を挙げることは混乱を招く一因となる。

全体に中学生に教えるのであれば、もっと単純に示す方法がよいものと思われる。

さらに県内での差も、東西アクセントの移行地域としては外せない情報であり、西濃地方や東濃地方での使用も考えると、「岐阜」(おそらく岐阜市のこと)で岐阜県を代表させてしまってよいかという問題もある。

以上の問題点をふまえ改良するとすれば、次のようにするのがよいだろう(△・▲は助詞。京阪式の1拍名詞は長音を伴い2拍化する)。

3拍形容詞		2拍名詞				1拍名詞			拍群	
B	A	D	C	B	A	C	B	A		
「白」 「熱」	「赤」 「厚」	「雨」 「春」	「笠」 「絹」	「山」 「犬」	「紙」 「川」	「風」 「水」	「絵」 「木」 「手」	「名」 「葉」 「目」	「子」 「血」 「戸」	語例
○ ● ○ ○ 型	○ ● ● 型	● ○ △ 型		○ ● △ 型		○ ● ▲ 型	● △ 型		○ ▲ 型	東京式
	○ ● ○ 型	● ○ △ 型		○ ● △ 型		○ ● ▲ 型	● △ 型		○ ▲ 型	恵那
	○ ● ○ 型	● ○ △ 型		○ ● △ 型		○ ● ▲ 型	● △ 型		○ ▲ 型	岐阜
	○ ● ○ 型	● ○ △ 型	○ ● ● ● ▲ ▲ 型 ・	● ○ △ 型		● ● ▲ 型	● △ 型		○ ▲ 型	垂井
● ○ ○ 型	(○ ○ ● ○ △)型	(○ ○ ○ ○ ● ○ ● ○ △)型		● ○ △ 型		● ● ▲ 型	○ ● ▲ 型	● ○ △ 型	● ● ▲ 型	京阪式

先にも述べたように、2拍名詞の2類と3類は同型であり合わせてB群としてある。

附属中学校での授業においては、このような複雑なアクセントの対応を話す余裕がなかった。むしろ

ろ、東京式を基盤にしているが、「服」「靴」「坂」「茎」など、C類(3類)の一部において東京式が尾高型の「○●(○)」となるのに対して、岐阜市方言では頭高型の「●○(○)」となるなど、普段気づかれていないアクセントについて話をし、まずは東京アクセントとも違うことを認識させた。また、形容詞の「赤い」と「青い」が別のアクセント型になる東京式に対して、岐阜市では同じく中高型の「○●○」となることなども、中学生には一般的に知られていないアクセントの事実である。ふだん共通語と同じであると信じて使っているアクセントが、実際の東京式アクセントと異なっている部分は、中学生にも新鮮に感じられる。

これらの違いを認識させた上で、所詮、東京と同じアクセントをすべての語について使うことは難しく、岐阜には岐阜のアクセントがあるということを説明することになる。今回は、「赤い」の活用形のアクセントも入れて、完璧に東京の人と同じアクセントで話すことがどれだけ困難であるかを話し、「岐阜では岐阜式アクセントで話していいのだ」ということを実感してもらった。

3.3 語彙・文法について

浜島書店『国語便覧』においては、東西方言の語彙の違いとして、「カライ・ショッパイ」、「ベニサシユビ・クスリユビ」、「オトツイ・オトトイ」、「ヒマゴ・ヒコ」が挙がる(下線は、岐阜県で用いられるとされる形式)。すでに「ベニサシユビ」も「ヒコ」も、授業をした50代の山田ですら聞き覚えのある語ではなく、中学生が知るよしもない。

文法として挙がる「チャ(ヤ)・ダ」、「買ウタ・買ッタ」、「白ウ・白ク」、「起キヨ・起キロ」については、前半2つが使用されるのに対し、後半2つは適切な例を添えないと通じなくなっている。

このような語彙・文法形式で方言を説明することも、常道と言え常道であるが、中学生に通じる語彙・文法形式で説明する必要がある。語彙については、3.1節にも挙げた「カド・ケド」や「B紙(模造紙)」のような学校でよく使われる語句を挙げるのもよいが、東西方言の差としては適切な例とならない。東京の「ワイシャツ」に対する「カッターシャツ」や、同じ通学区を表す「校区」でもよいかもしれない。東西方言の接点として、伝統的な語彙・文法の特徴を利用することは困難であるため、むしろ、東西境界については、音声と指定辞の「ヤ」に限定して話す方が中学生には伝わるのではないか。これまで伝統的に語られてきた語句が、中学校における方言教育に通じるかどうか、また通じない語句であっても教えたいのであれば、それなりの工夫をするなどをしないとイケない。

なお、岐阜県内での語彙の差について、「暖かい」、「カエル」、「支度」の3語が地図とともに挙げられている。岐阜県方言研究会という名で、かつて加藤毅氏らのグループが調査したもので、昭和まで存在した岐阜県内100の市町村が対象として調査がなされた貴重なデータである。

しかし、これも現代の中学生に通じるものと通じないものの差が見られる。「暖かい」を表す美濃地方の「ヌクトイ」は、飛騨地方の「ノクトイ」と大きく県内を二分する差として現れるが、両者が色違いとは言え同じく■の記号で表されている点はわかりにくい。むしろ「アタタカイ」や「アツカイ」を目立たない「・」などの記号とした上で、「ヌクトイ」と「ノクトイ」の記号を違えた方がよいだろう。今回、その読み取りにくさから、中学生に作業をさせた際に混乱を招く一因となった。

また、「カエル」については、飛騨に多い「ドンビキ」や西濃北部に多い「ビッキ」が暖色系の■で表されているが、それが目立ちすぎて、美濃に多く用いられる「ガイロ」がわかりにくくなった。「ガイロ」が青色の「○」、その連母音が変化した「ガーロ」が赤色の「○」で表されているのはよいとしても、同じく連母音の融合した形である「ギヤイロ」や「ギャーロ」が全く異なる記号である「▲」で表され色も統一感がない。中学生に読み取らせるのであれば、類似形式を関連ある図形にするなど配慮が必要であり、その配慮がないと中学生では読み取りが困難となることを知らなければならない。

「支度」を表す飛騨の「ヤワイ」と美濃の「マワシ」は、わかりやすい形式で表示されている。まずは、ここから、美濃と飛騨の差を知ることができようか。ただ、一方で、飛騨の形式がどのような

形式につながるのかは、やはり隣県の情報がなければわからない。少なくとも「マワシ」が尾張地方につながる形であることは知っておいた方がよい。

以上、語彙に関しては、現代の中学生になじみがない語句を除いた上で、さらなる工夫をして、現在でもよく使われる「青あざ」や「ばか」を用いてはどうだろうか。「青あざ」であれば、岐阜県内でも意外と近い岐阜市と大垣市でも異なっている。岐阜市では「クロニエ」が、大垣市では「アオジ」が用いられている。このような部活動でも頻繁に用いられる語句は、現在の中学生でも耳なじみがあり、共感を得ながら授業を進めることができる。一方、関西で「アホ」、東京で「バカ」、地元では「タワケ」という言葉は、中学生でもまだ知識がある。大きく全国を掴むのであれば、このようなわかりやすい語句を用いるのも検討されるべきであろう（卑罵語は当然問題となるだろう。その導入は学級の成熟度に依存する）。

語句・文法の分布を通して方言教育をする場合には、伝統的形式にこだわることは、今回の経験からかなり難しいと言える。伝統的形式は、むしろ、歴史と関連付けて、「ケナルイ（うらやましい）」が、平安時代にも用いられた「異なり」に遡れることを教えるなどの場面に限ることを勧めたい。

4. 調べ学習への発展

さて、今回の方言学習においては、大学教員がもっている知識のすべてをさらけ出して、たった2時間、全力ですべてを語ったわけではない。むしろ、中途半端に止めてすべてを語らないことを心がけた。それは、生徒の中に「知りたい」という気持ちを残すためである。

附属中学校の生徒は、もちろん全員ではないかもしれないが、学ぶ意欲に溢れている生徒が多い。寸止めにすればその先を調べようとするのも、附属中学校生徒のよい点である。

あえて何も課題として述べず、10日後にアンケートをおこない、4クラスのうち3クラスから回答を得た。なお、アンケート内容は、附属中学校教諭による検討を経て、当初予定していた、授業満足度や理解度を削り、自由記述欄を多くした。中学校では、授業評価自体がまだ一般的でないことの現れかもしれない。

まず、「方言について、さらに知りたいことや疑問はありますか。」という問に対しては、「特にない」という回答が少数（1組7名、2組7名、3組0名）であったことが特徴として挙げられる。どのクラスも40名定員で、若干の欠席者があったにせよ30人以上の母数を有しているため、8割以上の生徒が何らかの疑問をもったということである。これは、授業者としては期待した効果が得られた結果であると捉えた。

知りたい内容については、次の通りである。いずれも生徒の書いた文章のままではなく要約したものである。

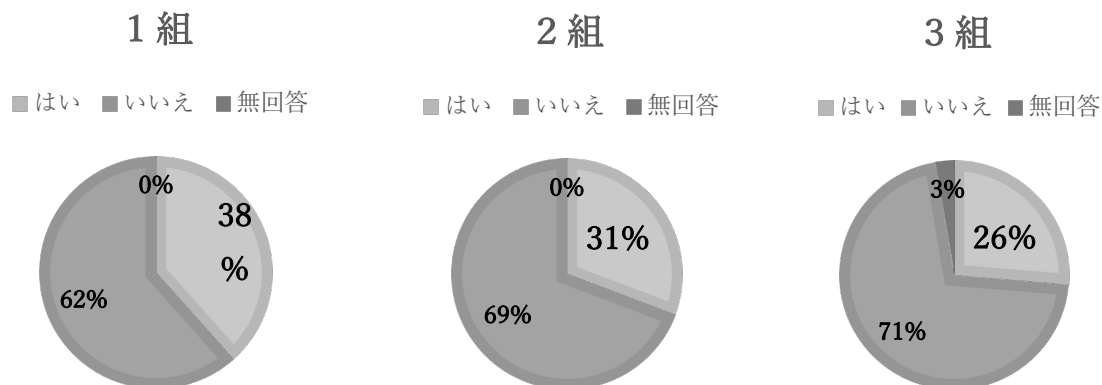
- ・方言はなぜ生じたのか。
- ・岐阜県の方言についてより詳しく知りたい。
- ・他の地域の方言について知りたい。
- ・海外の方言について。

以上の回答が多く寄せられたほか、下記のような少数意見も見られた。

- ・「方言」を後世に残すために、何が必要か。
- ・本土と琉球の言語に分かれる前の言語を知りたい。
- ・～「弁」といわない地域や県はあるか。
- ・縦に長い国、横に長い国で、縦に長い国の方が方言はつくられやすいと考えたが、あっているのかということ。

授業者が意図した岐阜県方言を故郷の財産として持つということが、少数意見であるとは言え、生徒からの「知りたいこと」に挙げたことは望外の喜びであった。

一方、実際に調べたかどうかを問うたところ、次のような結果になった。



もっとも多く「実際に調べた」という1組でも38%の生徒のみが実行に移したという結果となった。このことは、学校で学んだことをどう実践させるのかには、何らかの強制力が必要なかもしれないと感じられる結果であった。ただ、実際にこの授業を受けたことで、自発的な学びを模索した生徒が、総じて3割程度いたことをポジティブに捉えることもできるのかもしれない。

では、実際、どのようなことを調べてみたのか、具体的記述を順不同で挙げる。

[どのようなことを]

- ・ 沖縄の方言について
- ・ 他県の方言について（母から七尾弁について）
- ・ 「半分、青い。」の岐阜弁について
- ・ 海外の方言
- ・ 方言を話すアニメキャラ

[何を使って（どのように）]

- ・ 身内から聞いた。（祖母、父など）
- ・ 辞書や本
- ・ You Tube
- ・ NAVER まとめ
- ・ 国立国語研究所（方言地図のサイト）＝3人
- ・ 電子辞書に入っているコンテンツ

国立国語研究所の方言地図については、授業内でも言及したため、サイトを訪れた生徒もいたであろう。だが、一般向けのみならず、中学生、あるいは高校生も含めて、全国の方言教育に観点を置いた方言資料が、国立国語研究所のサイトにあれば、さらに良質な方言に関する情報を一般生徒に届けられることも示唆された。ぜひ、今後は、このような、学校教育に資するサイトの開発を、特定地域のみならず全国的な協力体制を構築しながら進めていきたい。

5. 実践を振り返って～中学校の立場から

考察の最後に、中学校で日々国語の授業をおこなう教諭の立場から授業実践を振り返ってみる。

中学校2年生の国語の授業は年間140時間ある。その中で方言を扱うことができるのは2時間である。その限られた時間の中で、生徒たちに何を感じさせ学ばせるのか、毎年頭を悩ませるところであったが、今回の実践を通して今後の指導の方法が見えてきたように感じた。

今回の実践での成果は以下の2点である。

- ① 授業後の自主学習につなげることができた。

② 岐阜の方言の特徴やよさを学ぶことができた。

①について、昨年までは、方言の授業内で簡単な調べ学習を行っていた。そのため、なかなかその後の学習につなげることはできなかった。前述した通り、今回、授業後に調べ学習を行った生徒は3割程度であったが、自分から調べてみようとする生徒がおり、方言に対する興味・関心をもたせることができた。

また②について、これまでの授業では方言と共通語の特徴を捉えさせ、時と場に応じた使い分けが必要であるということを生徒たちには考えさせてきたが、方言という大きなくくりで考えさせてきたため、岐阜の方言について触れる機会は少なかった。しかし、今回の実践では岐阜の方言の特徴に触れる機会を多く設定したため、日常生活の中で自分たちが使っている言葉について考えることができ、岐阜の方言の特徴や良さを学ぶことができた。

次年度実践する際に考えたいことは以下の3点である。

- ① アクセント・イントネーションや文末表現以外の方言（言葉）をどのように実感させるか。
- ② 生徒が使いやすい教具の開発が必要である。
- ③ 2時間という限られた時間でどのような授業を行うか。

①について、特に導入部分の改善が必要だと感じた。上でも述べたとおり、授業の導入部分で用いた方言の会話は、生徒に馴染みのない（聞きなれない）ものであったようで、反応があまりなかった。その原因は、生徒たちの方言に触れる機会の減少ではないだろうか。「方言は、家族や地域の人との交流の中で自然と身につく言葉」という特性が教科書で示されている。しかし、生徒の実態を見ると、必ずしもそうであるとは言い切れない。事前に実施したアンケートの「祖父母と同居しているか」という項目を見ると、同居していると回答した生徒は2割程度であった。また、岐阜県で使われている方言についていくつか取り上げ、「聞いたことがあるか」「意味を知っているか」を聞いたところ、「聞いたことがあり、意味もわかる」と回答した生徒は1割程度であった。生徒たちは、イントネーションや文末表現に対しては、岐阜独特のものがあるという認識はあるが、語彙的な面ではあまり認識がないようである。この結果から、生徒たちが方言に触れる機会が減少しているのではないかと考えられる。そのため、生徒が「方言だ」と認識し、スムーズに活動に移っていけるような導入部分の工夫が必要である。

②について、今回は国語便覧や国立国語研究所の資料を用いたが、生徒の実態や知識を考えると、使いこなすのは難しいように感じる。授業終了後に自ら調べ学習を行う生徒が多かったことを考えると、使用しやすい教具や実態にあった教具を作成する必要があるように感じた。

③について、2時間の授業をどのように構成するかも工夫が必要である。今回は講義形式の授業が中心であったが、生徒の活動をもう少し増やせると良いのではないかと感じた。しかし、2時間という授業時間の制限があるため、中学校2年生に教えるべきことと考えさせるべきことを整理し直し、今後も自分で学んでいきたいと生徒に感じさせるような授業実践するべきである。

6. おわりに

方言に関する研究会において発表した際にも言われたことであるが、このようなコンパクトにまとまった方言資料が、多くの生徒の手元にあるのは、岐阜県に特有のことだそうである。他県にこのような県内方言を概観できる資料は、そもそもない場合が多い。その点では、岐阜県の国語教育に携わってこられた先生方の功績は大きい。そして、それが内容的にさらにブラッシュアップされ、時代に合わせて多少生徒の実態に合わせた形に変わろうとも、岐阜県の方言教育はアドバンテージを持ち続けるであろう。

教材はある。そして改良を重ねればよい。残る課題は何か。それは教え方の開発と副教材の整備である。山田が、大学教員ができることとして、岐阜県方言を広範かつ詳細に調べられる辞書は作成し

た。文法に関する記述もおこなった。後は、5 節でも述べたとおり、附属学校での実践を積み重ねながら、より生徒の実態に合わせ、どのような教員が教えても教えられるような教材を作っていくことが課題である。

現在、夏休みにおこなっている教員免許状更新講習では、岐阜県方言の教え方を考える講座を開講中である。この講習が短期のカンフル剤としてだけでなく、長期にわたってふるさと教育に活かされていくようになるには、まだまだ県の国語教育界との協働が必要である。今後も継続して岐阜県方言の教授法開発に邁進していきたい。

付記

この実践に関する内容は、5 節を除き、2019 年 5 月 18 日の実践方言研究会（甲南大学）において、山田が発表した内容をまとめなおしたものである。研究会の席上、種々有益なご意見を賜った参加者諸氏に感謝申し上げます。もちろん、本論文の不備は、著者に帰せられるものである。

【参考文献】

岐阜大学教育学部附属中学校編(2018)『中間研究報告 新しい時代を生き抜く生徒の育成 一学校と社会をつなぐカリキュラムの設計（1 年次）』

- [1] 岐阜大学教育学部教授
- [2] 岐阜大学教育学部附属中学校教諭

(令和 2 年 1 月 6 日受理)